≪特集≫　歴史のなかでソ連社会主義を探照する

ロシアの資本主義化の歴史的先例

冨　岡　庄　一

I. はじめに

第20回比較経済体制研究会夏期研究大会（2001年8月2日）において，「歴史のなかでソ連社会主義を探照する」という統一テーマの下，「ロシアの資本主義化の歴史的先例」という個別テーマで報告させていただいた。

「歴史のなかでソ連社会主義を探照する」という統一テーマの趣旨について，田中宏氏が当日行った説明を筆者なりに理解すれば，次のようになる。歴史のなかでソ連社会主義を探照する場合，3つの歴史的地点からソ連社会主義を照らし出す作業を行うことになる。第1は，19世紀半ばから20世紀初頭におけるロシア経済史の側面からソ連社会主義を展望すること。第2は，ソ連社会主義それ自体のなかで社会主義と呼ばれた現象を評価すること。第3は，現在進行中のロシア市場経済化の側面から，市場経済化のロシア的特殊性の歴史的起源をソ連社会主義に求めること。以上である。

筆者は，19世紀半ばから20世紀初頭のロシア経済史を専門としており，ソ連社会主義を直接扱ってはいない。そのような筆者が，上記の統一テーマに貢献できるとすれば，趣旨の第1ということになる。そのような了解の上で，当日の報告をさせていただいた。『比較経済体制研究』第9号に投稿するこの文章も，同様の位置付けにあることをおことわりしておく。

II. 19世紀半ばから20世紀初頭における ロシア経済の捉え方

19世紀半ばから20世紀初頭のロシア経済（資本主義）をどう評価するかは，帝政ロシアからソ連，さらに体制転換後ロシアへという歴史的推移によって大きく影響されてきたと言えよう。つまり，ソ連時代には，19世紀半ばから20世紀初頭のロシア経済は，革命によって否定された存在として，遅滞性，後進性など，マイナス面のみをことさらに強調する傾向があった。逆に，体制転換後のロシアでは，ソ連社会主義の否定的側面がとりわけ強調される反面，19世紀半ばから20世紀初頭のロシア経済について，バラ色の幻想を抱く論調が多かったように思われる。

筆者は，いずれの傾向にも疑問を抱き，19世紀半ばから20世紀初頭におけるロシア経済を，できるだけ客観的かつ総合的に把握しようと試みてきた。

具体的には，経済史研究において，比較的客観的な史料と考えられる統計資料，それも部分的なものではなく，できるだけ広範かつ長期的な統計を分析して，当時のロシア経済の「実態」，「全体像」を把握するという方法を採用した。但し，「客観的に」分析するとはいっても，単に数字の世界に埋没することではなく，この作業は，従来の諸研究を「横目で見ながら」，それらの主張を吟味しなおすことでもあった。このような作業を踏まえて，19世紀半ばから20世紀初頭のロシア経済が，

如何なる問題（時期によって異なるであろう）を抱えつつ，どのように機能していたのかについて，できるだけ体系的に，自分なりの見通しを得たいと思った次第である[1]。

まず，外国貿易の分析を中軸に据えることにした。その理由は，19世紀半ばから20世紀初頭のロシアは，その前後の時期と異なり，基本的に「開放経済体制」をとっており，「国際的契機」（この場合外国貿易）がロシア経済の動向に大きな影響を与え，またロシア経済の変化が外国貿易のあり方に直接反映されていたと考えたからである。従来の研究の枠組みが，「国内的契機」を中心とし，外国貿易は最後に，そして周辺に位置付けることが多かったことに対する批判でもあった。さて，外国貿易の分析によって明らかにすることができたのは，①1860－70年代の貿易赤字（その事実自体は従来から分かっていた）の構造的特質，②1880年代を境とする貿易黒字への転換の背景に食料品（穀物）輸出体制の成立があったこと，③その食料品（穀物）輸出体制の成立は国際穀物市場の動向に規定されたものであったこと，④20世紀に入って，食料品（穀物）輸出体制が動揺し始め（小麦輸出の停滞），また輸入では，繊維原料（従来は綿花中心）の中身が多様化し，鉄および同製品が後退して非鉄金属および同製品が増加し，機器の中では工業用機器よりも農機具が増え，化学製品輸入の中心が染料完成品から他の製品（半製品，素材を含む）に移る，といった変化が生じたこと，そして，⑤このような貿易動向の変遷の中で，ロシアの貿易相手が益々ドイツに集中していったこと等であった。

外国貿易の分析によって明らかにすることができた諸点のうち，1880年代を境とする食料品（穀物）輸出体制の成立と20世紀初頭の食料品（穀物）輸出体制の動揺（小麦輸出の停滞）とが，ロシア農業を検討する際の「導きの糸」となった。即ち，農業に関する諸統計の分析を通じて，食料品（穀物）輸出体制の成立は，1880年代を境に，穀作の重心が旧来の中央農業・ヴォルガ中流地方（ライ麦，エン麦）から新興の新ロシア・ヴォルガ下流地方など（小麦，大麦）に移動していったことの結果であること，そしてその過程は穀物生産の増加，生産性のそれなりの向上，穀物商品化の進行を伴っていたことを明らかにすることができた。これらの点は，従来のロシア農業・農民史研究がほぼ一貫して中央農業地方を中心とした地域に焦点を当てていたことに対する批判となり，筆者なりの新ロシア地方農民経営研究の動機となった。また従来の研究がより貧しい旧領主地農民（ほぼ同数存在した旧国有地農民の方が相対的に豊かだった）に集中する傾向があったことも勘案して，これまでの諸研究がロシア農業の遅滞性・農民の貧困性（ひいては国内市場の狭小性）をことさら強調する結果になっているとの批判を展開するに至った。また，ロシアの穀物輸出＝飢餓輸出という把握に対しても，疑問を呈した。

農業諸統計の分析が示すのは，20世紀に入ると，穀物の商品生産が北カフカース，ステップ辺境，シベリアなどにも拡大することである。土地所有においても，変化が生じる。その中で，小麦の比重は大戦に向かうにつれて減退する。このような背景には次の事情があったことを明らかにした。新興穀作地方では，粗放的な農法が残存したが，近代的な農機具や役畜を積極的に用いることによって収穫を増やし，輸出向・国内向供給の増進という課題に応えてきたが，大戦直前期ともなると，そのような方式が限界に達しつつあった（特に新ロシア地方で）のである。つまり，食料品（穀物）輸出体制が動揺（小麦輸出の停滞）するようになった要因の1つがロシア農業（穀作）それ自体にあったことを示した。もっとも，主要な要因としては，ロシアの経済発展そのものが穀物（特に小

麦）の国内消費を増大させたことにあったと考えている。いずれにしても，20世紀初頭の食料品（穀物）輸出体制の動揺は構造的なもので，19世紀半ば以来の工業化を支えてきた貿易黒字体制の見直しを迫るものとの認識に到達した。

20世紀初頭における輸入貿易の変化，つまり繊維原料の多様化，鉄および同製品の後退，非鉄金属および同製品の増加，工業用機器よりも農機具の増大，染料完成品以外の化学製品（半製品，素材を含む）の増加といった変化がロシア工業の動向を反映しているものとの想定の下で，工業諸統計の分析を行った。その結果，20世紀に入ると，特に大戦直前に向かうにつれ，①綿工業だけでなく，羊毛工業，絹工業などが多様な展開をみせ，②鉄道関連以外の一般機器の製造が増え，③製鉄業が安定成長に入るとともに，非鉄金属生産および同加工業が発展し始め，④化学工業も発展し始めるという結論を得るに至った。

また，ロシア工業の長期的な変化に関わる諸統計の分析は，軽工業部門（繊維工業や食料品製造業）が，一貫して工業労働者の過半を占め，19世紀半ば以降20世紀初頭に至るまで（鉄道関連諸工業が沈滞する1880年代，恐慌と不況の時期とされる1900年代においても）順調な発展を遂げたことを示していた。これらの点は，従来のロシア工業研究にみられた傾向，つまり国家の直接的な保護育成の対象となり，また外国資本が主に流入した重工業（特に鉄道業と鉄道関連諸工業）に議論が集中するという傾向に疑問を抱かせ，19世紀後半の工業展開，及び1900年恐慌を筆者なりに見直すきっかけとなった。

こうして，①鉄道関連以外の諸工業（レール以外の鋼材や一般機器の製造など）が既に1880年代以来成長の兆しをみせるようになるが，1890年代における鉄道建設の盛況の陰に隠れ，また露独通商条約体制の下で掣肘を加えられていた点，②1900年恐慌の際にも製鉄業以外の諸工業の打撃はさほど深刻ではなかった点，③そしてこれらの展開を受けて，大戦直前期に上記のような発展に到達する点などを指摘することができた。これは，従来の国家・鉄道・外国資本・重工業を中心とした工業史研究が，工業全体についてのバランスのとれた理解を阻み，ロシア工業の浮草的脆弱性を一面的に強調し，さらに国内市場問題や生活水準問題などについて偏った結論を導かせることになったとの批判につながった。

ロシアは，クリミア戦争の敗北を契機として，大国としての地位からの脱落という危機の下，19世紀半ば以来，急速な工業化路線を追求した。ロシア経済（農業も含めて）はそれなりの発展を示したと考えられる。ただ，そのような発展が（ないしは，そのような発展があったからこそ），20世紀に入って，従来の路線を行き詰まらせ，新たな路線を求めさせることになった。急速な工業化を支えていた食料品（穀物）輸出体制が動揺し始めていた。大戦直前期のロシア工業の展開は，それまで工業化を支えていた輸入（特に工業完成品）がロシア工業の一層高度な発展にとってかえって桎梏と化しつつあったことを示す。このような矛盾は，最大の貿易相手であるドイツとの間において集中的に表れる。ロシアは，一層高度な経済発展に向けて，新たな路線を模索せざるを得ない段階に達しつつあった。

以上のような試みは，拙著『ロシア経済史研究 ── 19世紀後半～20世紀初頭 ──』として形を成した[2]。それぞれの点について，より詳しくは拙著をご参照願いたいが，ここでは，20世紀初頭のロシア経済について，改めて簡単にまとめておきたい。というのは，19世紀半ばから20世紀初頭におけるロシア経済史の側面からソ連社会主義を展望するという課題について，特に20世紀初頭のロシア経済が如何なる発展（段階）に到達しつつあっ

たかを考察することを通じて，課題の解明を試みたいからである。

III. 20 世紀初頭のロシア経済

まず貿易である。19 世紀半ば以降工業化路線に努めてきたロシアは，後述の如く，20 世紀初頭にそれなりの果実を手にする。それは，機械をはじめとする各種工業製品，工業用原料，近代的な技術，そして資本などを先進国からすみやかに輸入することが出来たからである。その膨大な輸入を賄ったのが，急速に増大した穀物輸出である[3)]。

20 世紀に入って輸出が急増する。輸入も急激に増加するが，貿易収支の大幅な黒字は大体において維持される。ただし，輸入の増加率が輸出のそれを上回る傾向を示し，特に大戦直前の 1913 年には，輸出が減少気味なのに対して，輸入がかつてない程の増加率（単年で）を示す。そのため貿易収支の黒字幅が縮小する傾向にあった。輸出構造は，依然として食料品中心であるが，1900 年代後半以降，食料品の比重が減少傾向にあるのに対して原料・半製品の比重が増加しつつある。輸出先は，第 1 位のドイツのシェアが一層拡大する。ロシアの輸出総額に占める比重は穀物が圧倒的だったが，大戦直前期になると 4 割にまで減少する。その原因は小麦の比重の大きな後退である。大麦の輸出が増え，卵，バター，砂糖なども輸出されたが，食料品全体が輸出に占める比重は減少する。

輸入も，20 世紀に入って，特に好況期である大戦直前期にかつてないテンポで増える。輸入構造は，原料・半製品が 5 割前後を占めるという，1880 年代以来の大勢は基本的に不変である。但し，1900 年代後半以降の輸入急増期に原料・半製品の比重がやや減少傾向を示す。他方，完成品の比重は，1900 年代を通じて増大し続け，大戦直前期には 3 割を越えて，かつてない大きさに達する。主要輸入先は，1 位のドイツのシェアが益々増大する。輸入品目は多岐にわたるが，①機械・器具の輸入が全体として急増する中で，工業用機器の比重は減少し，②繊維原料の輸入では，綿花だけでなく，羊毛，原料絹（繭など）など，輸入品目の多様化が進み，③未加工金属の輸入では，鉄および同製品から非鉄金属および同製品に重心が移り，④化学製品の中で，化学・製薬材料の輸入が増える，などの変化がみられた。

次に農業である。20 世紀に入っても，ロシアでは，穀作（小麦，大麦，ライ麦，エン麦）が農業の中で重要な位置を占め続けていた。20 世紀初頭，四麦生産合計は 1880 年代以来の増勢を維持していた。その中で，ライ麦・エン麦の比重減退，小麦・大麦の比重増大という傾向が一層顕著になりつつあった。地方別にみると，特に新ロシア地方とヴォルガ下流地方の収穫量（小麦・大麦）は 1880 年代から大戦直前期にかけて 2 倍以上に増える。また 20 世紀初頭には，北カフカース，ステップ辺境，シベリアなどで穀物栽培が急速に広がっていく。他方，旧来の穀作の中心だった中央農業地方やヴォルガ中流地方（ライ麦・エン麦の栽培が中心）は穀作における地位を一層低下させていく。穀物の商品化率（鉄道や船で地域外に搬出される穀物の比率）においても，ヴォルガ下流地方，新ロシア地方，北カフカース等が高かった。これら地方は，主として輸出向けに穀物を搬出していた。土地所有においても，新ロシア地方，ヴォルガ下流地方では，20 世紀初頭に大きな変化が生じる。つまり，貴族などによる土地販売，農民などによる土地購入が盛んだった。ストルィピン改革の中で土地所有権を確定した農家の比率も高かった。ところで，順調に収穫を伸ばしてきた小麦であるが，大戦直前期になると，四麦全体の収穫量の中での比重を減退させる。その主因は，小麦の一大生産地であった新ロシア地方での生産の伸び悩みにあ

った。そもそも，新ロシア地方やヴォルガ下流地方で穀物生産が急増した背景には，粗放的な農法・近代的な農機具・多くの役畜といった組み合わせがあった。この組み合わせが限界に達しつつあった。また，20 世紀に入ると，工業化の進展の結果，ロシア全体として，穀物の国内消費が増える。しかも，都市だけでなく，農村（南東部を中心に）において，ライ麦に代わり小麦の消費が増えつつあった。小麦が，特に大戦直前期に，輸出の中での地位を後退させていった背景にはこのような状況があった。

そして工業についてであるが，20 世紀に入ったロシア工業（鉱山業を含む，以下同じ）は，1900 年恐慌の洗礼を受ける。物価・株価の下落，企業の倒産，失業といった現象があったのは事実として，恐慌の影響は，製鉄業関連の諸業種では明瞭に看取されるが，他の工業部門では，少なくともロシア全体からみて，さほど大きくはなかった。恐慌に続く「不況期」（1908 年頃まで）と大戦直前好況期（1909－1913 年）に，軽工業を中心に底堅い成長がみられる。そして，それを受けて，大戦直前好況期に，工業全般が急速に発展する。繊維工業では，綿工業だけでなく，羊毛工業，絹工業などが多様な展開をみせる。非鉄金属加工業，一般機械（機関車・車両を除いた様々な機械）製造業，化学工業などもある程度の発展を示す。このような展開は，20 世紀初頭（特に大戦直前期）における輸入貿易の変化と符合する。もっとも，化学工業や非鉄金属工業がある程度の展開をみせたとはいえ，成長し始めたばかりで，輸入に代替しうるものでは勿論なかった。工業・農業用の一般機械の製造も，輸入を駆逐しうる程ではなかった。但し，従来のロシア工業において極めて脆弱であったこれら諸業種の発展可能性が生じた点は注目に値する。1890 年代の好況では，重工業（製鉄業，鉄道用材製造業，石炭業など）がもっぱら鉄道建設に依拠して発展し，軽工業（消費財産業）の展開とは切り離されていた。しかし，大戦直前の好況では，国家（鉄道建設）の役割が縮小し，資本財産業に対する需要が，消費財産業から生じるようになる。換言すれば，重工業（資本財産業）と軽工業（消費財産業）との間に，有機的な関連が形成されるようになったと言えよう。

IV. おわりに

1894 年に締結された露独通商条約（協定関税を含む）は，1904 年に一部修正の上更新されて，1917 年末まで効力を持つことになっていた（実際には，戦争の勃発によって，1914 年末に失効する）。1911 年頃から，露独両国で，通商条約の来るべき期限切れに向けて，通商条約及び両国間貿易それ自体についての再検討が本格化する。再検討の作業は大戦が始まってからも，大戦後を展望しつつ，続けられる。特に敏感かつ迅速な対応を示したのがロシア側だった。政府諸機関（大蔵省，商工業省，農業・土地整理管理庁など），実業界（モスクワ・ワルシャワの製造業者，南部ロシアの鉱山冶金業者，化学工業界，ロシア輸出会議所，農業諸団体など）などが関わった。また，露独間の貿易・通商条約について数多くの著書・論文が発表された。他方ドイツ側は，現状に基本的に満足していたため，腰が重かった。ロシアでの論調の大半は，ドイツとの貿易や通商条約について，多かれ少なかれ批判的だった。そのような論調の多くは，ドイツへの経済的従属（依存）があまりにも大きすぎ，ロシアはそのような状態から脱却すべきとするものである。そして，もしも関税制度を変えれば，またロシアの企業家がもっと努力をし，国家がもっと有効な保護政策をとれば，ドイツへの経済的従属（依存）は軽減することができる，ロシアはそれが可能である，という認識を持っていた。さ

らに，ロシアには，外国に依存せず，自立した（基本的に自給自足的な）経済単位になりうる条件がある，という主張さえみられた。

19 世紀半ば以降のロシアは，国家による直接・間接的な保護育成政策の下で，先進諸国からの機械・設備，技術，資本の積極的な導入，工業生産に欠かせない原料・半製品の大量輸入などに支えられて，急速な工業化路線を進んだ。その結果，一定の成果は得られたといえよう。19 世紀後半における綿工業，製糖業，鉄道用材製造業，石炭業，製鉄業，石油業などの発展に加えて，20 世紀初頭（特に大戦直前期）における羊毛工業，絹工業，非鉄金属加工業，一般機械製造業，化学工業などの展開がそれである。しかし，それは同時に，ドイツとの貿易摩擦を生み出すことになった。つまり，ドイツからの機械，化学製品，非鉄金属などの大量輸入は，ロシア工業の一層高度な発展にとって，桎梏に転じつつあったといえよう。

また，ロシアの貿易収支は 20 世紀に入っても一応黒字を維持するが，黒字幅は縮小する傾向にあった（特に大戦直前期）。その原因の 1 つは，輸出の大黒柱だった小麦の減退にあった。それは，前述の如く，工業化・都市化の進展の必然的な帰結でもあった。大戦直前期に向けて，ロシアの食料品（穀物）輸出体制は揺らぎ始めるが，それに代わって輸出を安定的に増進させうる体制の成立の見通しは立っていなかった。それは，工業化に急ブレーキがかかり，ロシアが採用してきた経済発展路線が破綻することを意味した。このジレンマは，農産物（特に穀物）輸出に益々依存しつつあったドイツとの関係において，最も尖鋭に現れることになった。

要するに，大戦直前期のロシアは，経済的自立の達成に向かうためには，新たな工業化の道を摸索し，ドイツとの経済（特に貿易）関係を再調整しなければならない段階に到達しつつあった。しかし，ドイツとの経済（特に貿易）関係を再調整する，具体的には露独間の協定関税率をロシア側に有利に改訂するというロシアの願望は，ドイツが容易に受け入れるところではなかった。露独通商条約の再検討をめぐるロシア側の議論にみられる「苛立ち」は，それを反映していたと受け止めたい。

ガーシェンクロンは，大戦前夜のロシア工業は次の成長のための準備段階にあった，つまり新たな発展のための諸条件が形成されつつあったとみる。筆者も賛成である。ただ，ガーシェンクロンは，それが故に，もし第一次大戦がなかったら，ロシアは西欧化の途を更に一層進み続けたであろうとみる。しかし，私見では，ロシア工業がそのような段階に到達したが故に，ロシアと最大の貿易相手であったドイツとの間で，経済的対立が醸成されていったと考える。第一次大戦でロシアとドイツが相戦うに至った経済的背景（国際政治的要素は言うまでもない）として，この点は重要な要因の 1 つであると考える。ロシアがドイツと戦場で対峙する（当然，勝利または優勢のうちの終戦を願って）に至る背景には，ロシアの側からみて，それなりの経済的根拠があったことを指摘したい。

しかし，第一次大戦において，東部戦線をロシア単独で支えうる程，ロシアの経済力が充実していたわけではない。また，遅れた政治・社会体制は，総力戦に到底耐えられなかった。そもそも，政治・社会改革がほとんど進まない中で，政治・社会体制と経済発展とのズレが最も大きくなったのが 20 世紀初頭のロシアであった。つまり，経済発展は国民大衆にも少なからぬ影響を与えたと思われる。ひとり当りの国民所得は，1861 年と 1913 年とを比べると，1.7 倍に増えたという推計がある。「富」そのものは減少するどころか，急速に増加した。しかし，ダイナミックな経済発展の中で，

「富」の分配における不平等ないしは不平等感はむしろ拡大したと考えられる。土地（農地）の分配において，貴族全体と農民全体との関係では，貴族の私有地を農民が購入することによって，不平等は緩和の方向に向かっていた。しかし，農民の間では，土地の所有・用益をめぐる不平等・不平等感は拡大したと思われる。また，身近な生計維持への関心だけでなく，国民としての権利に対する希求，更には政治参加の要求も高まったであろう。つまり，20世紀初頭のロシアでは，民主化，すなわち政治改革及びそれと密接に関連する社会改革を求める気運がことのほか高まっていたと考えられる。相次ぐ敗戦による混乱の最中，1917年が訪れる。

I. ウォーラーステインは，ロシア10月革命を，半周辺国としてのロシアが，周辺的地位に転落する危機を回避するために採った「世界経済からの重商主義的な部分撤退」であると把握する。社会主義革命とは，「革命前のその内部経済構造に関して，熟練労働力，若干の工業およびその他の要因の点である最低限の能力をもっていた国」が「資本主義世界経済の枠組の内部で重商主義的部分撤退という技法を用いることによって適当な期間（たとえば30年から50年）の内に世界分業におけるその役割を変え」ようとしたものと理解する。そしてロシアは，「第二次世界大戦の終わりには・・・半周辺のきわめて強力なメンバーとして復帰し，完全な中核の地位を追求し始めることができるようになった」とされる[4)]。

19世紀半ば以来の工業化の試みによって一定程度の成果を挙げ，それが故に第一次大戦直前期に袋小路に陥りつつあったロシア。同じ大戦直前期に，多額の資本輸入に伴う利子・配当支払をはじめとする貿易外収支赤字が増大する中で，貿易収支黒字が減少し，国際収支が悪化の兆候を示すようになるロシア。国際的孤立の中で，一国社会主義の建設を目指したソ連。ナチス・ドイツの攻撃を防ぐことができ，第二次大戦後（一時的とは言え）アメリカ合衆国と覇を競った超大国ソ連。これらの情況を考え合わせると，ウォーラーステインの指摘は，含蓄に富んだものと言えよう。

注

1) 以下は，拙稿「自著をふりかえって」『社会文化論集』（広島大学総合科学部），第6号，1999年に依拠。

2) 本書についての最近の書評として，ジャコノヴァ（I. A. D'yakonova）氏によるものがある。*Voprosy Istorii*, No.10, 2000.

3) 以下は，拙稿「20世紀初頭のロシア経済」『社会経済史学』，第61巻第2号，1995年，および拙著『ロシア経済史研究』，有斐閣，1998年に依拠。

4) I. ウォーラーステイン『資本主義世界経済 I』（藤瀬浩司，麻沼賢彦，金井雄一訳），名古屋大学出版会，1987年，36，39ページ。

（とみおか　しょういち　広島大学）